

英国有数の風景式庭園に宿泊！

ゴシック・テンプルを征く



●征くシリーズ●取材・執筆／ネイサン弘子・本誌編集部

歴史ある庭園の広大な自然の中に滞在することができるというホリデー・ハウスが、イングランド南東部バッキンガムシャーにある。かつてその財力が英国王を凌ぐとも言われたテンプル家が築き上げた「ストウ・ランドスケープ・ガーデンズ (Stowe Landscape Gardens)」にたたずむ「ゴシック・テンプル (Gothic Temple)」だ。今回は英国屈指の名庭園に囲まれた歴史的建造物に、別荘気分で泊まるという、ひとあじ違った週末の過ごし方をご提案することにしよう。

次なる興味の対象となったのが、壮大な新居を取り巻くにふさわしい庭園である。この果てしなく広がる領地に、ストウ・ランドスケープ・ガーデンズの基礎を築いたのが、野心的な政治家でもあり、後にコバム子爵に叙せられた6代目当主リチャード・テンプル (1675～1749年) だ。コバム子爵は豊潤な資産を惜しみなくつぎ込み、当代きつての名造園家、建築家を集めてこの一代事業を遂行することにした。

当時、ストウの造園を指揮していたのは、英国庭園史上でも重要人物のひとつに間違いなく挙げられる男、ウィリアム・ケント (1685～1748年) であった。広大な土地をキャンパスに『風景画を描くように』造園を行うと称され、当時の流行の最先端をゆく「風景式庭園 (Landscape Garden)」の基礎を築いた人物である。17世紀後半、フランス式の整形庭園が流行し、英国にも多くの整形庭園が造られたが、18世紀に入ると、ヴェルサイユ宮殿の庭に代表されるような、完璧なまでに左右対称であり、徹底的に人工的に造られたフランス式庭園に対する嫌悪感が生まれた。やがて自然回帰が

造園の魔術師たち

ゴシック・テンプルが建つ、ストウ・ランドスケープ・ガーデンズ (通称ストウ) は、ミルトン・キーンズからオックスフォードへ向かう途中に位置し、F1世界選手権が開催されることで有名なシルバーストン・サーキットの程近くにある。地元の名士、テンプル家 (The Temple Family) が所有していたというこの地の歴史は、16世紀にまでさかのぼる。

牧羊を営んでいたテンプル家の初代当主、ピーター・テンプル (生年不明～1578年) が同地を借用したが、1571年。その後、彼の息子が当時すでに建っていた邸宅と土地を購入し、ストウは正式にテンプル家の領地となり、1922年に売りに出されるまで、約350年もの長きに渡り、代々テンプル家の地所として受け継がれてきた。

テンプル家は羊毛産業で財を成し、貿易業へと手を広げたのち、政界へも進出。一時は「英国王よりも裕福な一族」として、英国全土にその名をとどろかせた。しかしながら、我々には羨ましい限りであるが、「築き上げた途方もない財をどこに注ぐか」という問題は、当主たちにとつては大きな悩みであったのかもしれない。やがて考え出されたのが、新たなカントリー・ハウスの建造だった。屋敷の新築は、テンプル家の財力の見せどころ。5代目当主であるリチャード・テンプル (1634～1697年) は、それまで建てていた邸宅を完全に取り壊し、1680年に数十倍規模の「ストウ・ハウス」を建築した。

謳われ、ありのままのナチュラリスを求め、風景式庭園へと流行は移っていった。それを牽引したのがウィリアム・ケントである。

そしてケントに加え、コバム子爵の目にとまったもう一人の造園家が、「英国の景色を一変させた」と言われ、英国で最も有名な造園家として数えきれない程の名庭園を手がけることになるランスロット・「ケイパビリティ」・プラウン（1716〜83年）である。当時すでに才能を発揮し、造園家として成功の道を着実に歩んでいた若き日のプラウンは、ここで晩年を迎えていたケントから植物の知識や建築技術、土木工事といった大掛かりな技術までも学び、生来の才能に磨きをかけていく。

ケントの右腕的存在へと登りつめたプラウンは、彼の引退後、主任庭師として、ストウの造園事業を引き継いだ。ストウを訪れたコバム子爵の客人たちは、プラウンが創り出す風景式庭園に魅了され、ストウは英国随一の名庭園として、全土にその名が知れ渡っていった。

一方で、ストウはただ美しいだけの庭園に留まらず、反カトリックで自由主義であったコバム子爵の思想を反映させる場でもあった。庭園の各所に「Liberty（自由）」と名付けられた幾つものモニュメントが建造され、庭園を訪れる人に自



ストウ・ランドスケープ・ガーデンズにある「パラディアン・ブリッジ」から、丘の上にたたずむゴシック・テンプル（奥）を眺める。

由主義を印象づけるという目的を併せ持っていたのだ。今回の目的地であるゴシック・テンプルも、そうした仕掛けのひとつとして、コバム子爵が死去する数年前に造らせたものである。

1749年、コバム子爵が死去したのをきっかけに、プラウンは10年近くを過ごしたこの地を去る。そして、ブレナム宮殿やチャッツワースといった英国きつての屋敷の庭園を設計し、大きく羽ばたいたのだ。

呪われた公爵位

19世紀に入ると、テンプル家は繁栄の頂点を迎える。

時は9代目当主、リチャード・テンプル（1776〜1839年）の時。英国王ジョージ3世により公爵位

に叙せられ、リチャードは1822年、初代バッキンガム・シャンドス公爵（Duke of Buckingham and Chandos）となったのである。公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵と続く貴族位の中でも、最上の公爵位を授与されることは、一族の永年の大望であった。ついにその願いが叶う日が訪れたのだ。しかし、リチャードが叙された『バッキンガム』の名に、まゆをひそめる者も少なくなかった。バッキンガム公爵位は、何れも断絶の憂き目にあつて「呪われた」爵位と言われていたからだ。

時計の針を戻すこと、15世紀半ば。歴史上初めてバッキンガム公爵位を授けられた軍人ハンフリー・スタフォードは、6歳の息子を残し戦死。父の跡を継いだ第2代バッキンガム公ヘンリーは成長したのち、反逆罪で処刑され公爵位は廃位となった。彼の息子も謀反の疑いで処刑され、スタフォード家は断絶した。

17世紀前半、国王の寵臣ジョージ・ヴァリアーズにバッキンガム公爵の爵位が授けられた。約100年ぶりに復活した同公爵位だったが、ジョージはフランス遠征中に暗殺されてしまう。息子が爵位を継いだものの、嫡子に恵まれずにヴァリアーズ家も絶えた。

時は18世紀に移り、3度目に同公爵位を授与されたのは、マルグレイヴ伯爵ジョン・シェフィールド。ちなみに、このジョンが建てた邸宅が、のちに歴代君主の宮殿となるバッキンガム宮殿の前身である「バッキンガム・ハウス」である。ジョンは天寿を全うしたが、3人いた息子は未婚のまま死亡し、同公爵家はまたもや絶えた。

そして、4番目にして最後にこの爵位を叙爵されたのが、先述したテンプル家9代目当主リチャードであった。派手好きで浪費家だったという彼が、バッキンガム公にまつわる不吉な歴史を知らなかったとは考えづらい。だが、たとえ知っていたとしても、「公爵」位の魅力にはあらがえなかったのだろう。

名家の全盛と落日

父親から爵位と共に派手好きな性格をも受け継いだ、第2代公爵リチャード・テンプル（1797〜1861年、父と同名）の時代、公爵家は

またとない名誉を賜ることになる。1845年、当時即位3年目であったヴィクトリア女王がストウ・ハウスを訪れることになったのだ。

リチャードは、女王の滞在が3日間のみで予定であるにもかかわらず、ステート・ドローイング・ルーム（応接間）の改装に天文学的な金額を注ぎ込み、ありとあらゆる贅を尽くした広間へと変貌させ、ヴィクトリア女王を迎え入れた。赤を基調とし、目も眩むような金銀の装飾品やイタリア製の家具で飾られた内装を甚く気に入ったヴィクトリア女王は、すぐにお抱えの画家を呼び寄せ、この部屋の様子を絵に描かせたほどだったという。ちなみに、この時の絵画「The State Drawing Room (Temple Room)」は、現在も王室コレクションとして所蔵されている。

しかしながら、芸術品を買い漁ったことや女王を迎える為の莫大な支出が原因で、この栄誉からわずか2年後の1847年、公爵家は150万ポンドの負債を抱えて破産。リチャードは爵位を息子に継がせると、自身は地中海への船旅に出ってしまったというから、名家を破産に追い込んだ放蕩息子は、最後まで自分勝手なままであったようだ。

父が残した負債とともにストウ・ハウスを相続した息子の第3代公爵リチャード・テンプルは（1823〜89年、父と同名）は、一族の財政難を乗り切るために、屋敷中のありとあらゆる調度品を売り払うことを決意。大々的に広告を打ち、オークションが開催された。家具や美術品の他にも、作り付けの暖炉やドアまでもが無惨に引き剥がされてオークションにかけられ、ストウ・ハウスはもぬけの殻になった。バッキンガムの呪いの影響か、その生涯をかけて金策に駆け回った第3代公



ゴシック・テンプルの見晴し台からは、ストウ・ランドスケープ・ガーデンズが一望できる。

爵リチャードには、爵位を継がせるべき男児の嫡子が生まれなかった。こうしてバッキンガム公の爵位を叙した一族の宿命どおりに、テンプル家は絶えたのである。

ストウの再生

1922年、ストウ・ハウスが売りに出されると、新設のパブリック・スクールが買い取った。

翌年、全寮制寄宿学校として「ストウ・スクール」が開校し、ストウ・ハウスは英国屈指の名門校として生まれ変わった。邸宅は校舎や寄宿舎として利用され、庭園にはゴルフ場やクリケット場、陸上競技場などを新設。庭園に点在する40ものモニュメント群は、生徒たちの憩いの場となった。だが、750エーカー(東京ドーム約64個分)もの庭園を、『校庭』として管理するのは荷が重すぎたのだろう。1990年、庭園は一部を除き「ナショナル・トラスト」に寄贈されている。そしてこの年から、ナショナル・トラストによる庭園修復への大規模な挑戦が始まったのである。

ナショナル・トラストは、ストウ・ランドスケープ・ガーデンズをケイパビリティー・ブラウンが造園した直後の、最も美しかった姿へと蘇らせるべく、修

復プロジェクトを開始。散歩道は再び整備され、寺院や彫刻などの建造物を復元。枯れていた植物は植え替えられ、英国随一と讃えられた名庭園をいまでも楽しむことができるようになった。

救済されたゴシック・テンプル

さて、ナショナル・トラストが管理・公開をしているストウ・ランドスケープ・ガーデンズの中にたたずむモニュメントの中で、唯一他団体である「ランドマーク・トラスト」が保護と管理を行っている建物が、今回我々が紹介するゴシック・テンプルだ。ストウ・スクールを除く庭園内のほかの建造物とは異なり、なぜゴシック・テンプルだけがランドマーク・トラストの手にゆだねられることになったのか。

1970年、まだストウ・スクール自身が庭園を管理していた頃。校舎や宿舎として使用する邸宅と庭の管理に予想以上の莫大な費用がかかり、庭に点在する建造物の中でも規模の大きなゴシック・テンプルの修繕に費やす費用を、スクールは捻出できずにいた。そこに救いの手を差し伸べたのが、チャリティ団体のランドマーク・トラストである。同団体は小さくとも歴史的な建造物を保護し、それをホリデー・ハウスとして貸し出すことで、その収益を建物の維持・管理に活かすという活動を行っており、こうしてゴシック・テンプルはランドマーク・トラストの管理下に置かれたのであった。

ゴシック・テンプルは、前述した通り、ストウの庭園造りに情熱を注いだテンブル家の6代目当主であるコバム子爵が、テンブル家代々の先祖の『自由』のために捧げた寺院(テンプル)だ。寺院といつても、祭祀を執り行う目的で建



1階のリビングから見上げたドーム型の天井。中世ゴシック時代を思わせるような華やかなモザイクが眩しい。

てられたわけではなく、庭園のアクセント的建造物として、1748年に建てられた。設計は当時のストウ・ハウスの主任建築士であったジェームズ・ギブズ(1682~1754年)で、ギブズは英国を代表する建築家、クリストファー・レン(1632~1723年)の弟子であった人物である。なだらかな丘の上に建つゴシック・テンプルは、ストウの中で唯一ゴシック様式を取り入れた建造物。ゴシック建築の特徴である天に向かつて伸びるような直線的なデザインと、濃い茶色のライムストーン(石灰岩)が、緑に囲まれた風景式庭園の中で強い印象を放つ。

また、際立っているのは様式と色だけでなく、その形だ。建物を、真上から見ると、円柱型の3塔が正三角形をつくるように配置され、各塔を直線で結んだ中心に、さらに円形のドームが置かれている。建物自体は上から見ると三角形だが、室内はすべて円形という、非常に珍しい設計になっている(右記参

設計がユニーク! ゴシック様式 円塔ルーム

ベッドルーム

バスルーム

キッチン

1階 2階 螺旋階段

照)。小規模ながらも、ギブスの名作と言っていいだろう。

貴族気分で過ごす休日

テンブル家の歴史とストウの歩みをかけ足で追ったところで、いよいよホリデー・ハウスとしてのゴシック・テンプルをご紹介します。

カーナビゲーションの行き先をゴシック・テンプルのそばのストウ・スクールに合わせ、ロンドン中心部よりM40を北西方向へと車を走らせること、2時間弱。高速道路を降りたのち、しばらく続く田舎道を走っていると、ストウ・スクールの重厚感あふれるゲートが現れた。ナショナル・トラストの管理するストウとは入口が別なので、ここからは、ナショナル・トラストのシンボル・マーク「どんぐり」が表示された看板ではなく、ストウ・スクールのサインを目印に進もう。

ゲートを入ったら池に架かる石造りの橋を渡り、そのまま直進。周りには息を呑むような英国らしい庭園風景が広がり、歴史を感じさせるモニュメントが所々に姿を見せはじめる。やがて右手に現れたストウ・スクールの警備員室で「ゴシック・テンプルの宿泊客」であることを伝え、建物の鍵をもらおう。ちなみに、このゲートはゴシッ

ストウ・ハウス



■現在はストウ・スクールの校舎として使用されながらも、1997年に設立された「Stowe House Preservation Trust」の管理の下、一部を一般公開している（ツアーガイドのみ、昼12時30分～午後2時30分まで30分ごと、£5.75）。通常はストウ・ランドマーク・ガーデンズの入口で庭園とのセット券を購入することになるが、ゴシック・テンプル宿泊者は、ストウ・ハウスの入口で単独チケットを購入しよう。

■宮殿と見紛うほどの規模で、横幅は全長279メートル。ツアーのはじまりである屋敷の南玄関に入ったサウス・ホール＝写真下＝は、巨大な楕円形のドームの天井に施された彫刻が見物だ。北玄関に入ったノース・ホールには、浪費家であった初代バッキンガム・シャンドス公リチャード・テンプル夫妻と息子の肖像画が飾られている。

■「裕福な家の子息が、英国で最も多い学校」としても有名なストウ・スクールの生徒たちが足早に行き来する



様子を眺めつつ、本棚に似せた隠し扉がある図書室や、かつてヴィクトリア女王が滞在したステート・ドローイング・ルーム（応接間）を見学。眩いばかりの装飾品で飾

られていたというこの部屋には、当時の面影は感じられず、現在は学生食堂として使用されている。

■「Stowe House Preservation Trust」は、1840年代～1920年代に行われたオークションで売られた家具や美術品など、ストウの『失われた財宝』を買い戻し、復元する計画を進行中。世界各地に散らばったストウの財宝のうち数点がすでに同団体の手で買い戻されている。

ク・テンプルの宿泊者やスクールの関係者・通学者専用なので、ストウ・ハウスの見学者はナショナル・トラスト側の入口へ戻ろう（道順の詳細は12頁）。

ゴシック・テンプルの横に車を止め、鋲で装飾が施された大きな木製のドアを開けた瞬間、取材班全員が思わず感嘆の声をあげた。ドアを開けるとすぐそこは円形のリビングエリアになっており、窓の外に広がる景色とリビングの吹き抜けの高さ、天井の見事な装飾に目を見張る。暖房で十分に暖められたリビングにはソファとダイニング・セット、小さな本棚が配置されているが、テレビが見当たらない。ランドマーク・トラストの方針で、室内の装飾や設備



2階の吹き抜け部分から見下ろした、リビングエリア。必要最低限の設備ながらも、暖かく居心地のいい空間となっている。

名庭園をひとりじめ!

まずは、リビングを取り囲むように建つ円柱の1階部分を『探索』。一部

に閉しても、より建造時に近い静かな環境で過ごしてもらいたいとの思いからテレビを置いていないのだ。当然インターネットも繋がらないが、携帯電話の電波は届いていたのでご安心を。

やわらかなソファに深々と座り、吹き抜けの天井ドームを仰ぎ見ると、金色のモザイクに囲まれたテンプル家代々の紋章が、規則正しいパターンで描かれている。ドームを囲む自然な色のライムストーンとのコントラストが、より天井画の豪華さを印象づける。まるで黄金のフナタリウムのようなようだ。

そして、リビングの窓ガラス越しに広がる眺めにも感動を覚えずにいられない。刻一刻と表情を変ええる英国らしい空と雲、四季を通し青々とした芝、高くそそり立つ大木と静寂が建物を取り巻き、そこに身を置いていることに深い安らぎを覚える。ただ、ランドスケープ・ガーデンズを訪れた観光客が、ゴシック・テンプルが宿泊施設とは知らずに、稀にドアやガラス戸を開けようすることもあつたことなので、鍵はしっかりと施錠しておこう。

屋目はキッチン。シンクの目の前にある大きな窓からは、主婦が思い描く夢のような景色が広がり、この風景式庭園を見やりながら洗いや料理をするのは気持ちよさそう。キッチンには、食器、調理道具、電子レンジ、オーブン、電気式調理台など、一通りの道具が揃っている。ルーム・サービスはないため、外食か、このキッチンを使用しただけの自炊だ。自炊の場合は事前にスーパリーなどで食材を購入していくこと。ただ、ランドスケープ・ガーデンズ内にあるカフェまでは、徒歩で行けるので、散歩がてらカフェで昼食などを楽しむのもおすすめだ。

キッチンの次は、2棟目の円柱にあるバスルームを見学。建物の雰囲気似合ったアンティーク調のバススタブがバスルームの中心に置かれ、高い天井にある色鮮やかなステンドグラスからは五色の光が注ぎ込む。鳥の声や風の音だけが聞こえてくる静かな日中にぜひ湯につかってみよう。

3棟ある円柱の最後の1棟は螺旋階段になっており、ベッドルームのある2階へと続く。ローソク型のライトが灯ると、趣きのある急な螺旋階段を上っていると、思わず歴史ドラマの登場人物



ベッドルームの脇に設えられた、デスクスペース。

家族の記念日に、友人と過ごす大切な時間に、時に都会の喧噪を離れて静寂に包まれた時に、広大な庭を有する小さな居城の主になったような気分を過ごせる、このゴシック・テンプルを遊ばれてみてはいかがだろうか。

ゴシック・テンプル滞在中は、ランドスケープ・ガーデンズへの入場料の支払いは不要なので、開園・閉園時間を気にすることなく、まるで自分の庭のように散策するという『ぜいたく』が味わえる（ただし、ストウ・ハウスの見学は有料）。滞在者ならではの特権といえるだろう。

になったような気分。2階は1階のリビングを見下ろすことができる吹き抜け型になっており、建物にそった円形の廊下を歩きながら、いよいよベッドルームへ。

ベッドルームは2室あり、1室に2名ずつ、4名までが宿泊可能だ。ダブルベッドが1台やつと入るほどのごちゃごちゃとした部屋だが、各ベッドルームのドアの近くには、デスクや椅子ととも、旅行の荷物や衣類を置くことのできるスペースがある。ドアを開けたままベッドに横たわると、正面にゴシック様式の窓が見え、寝ながらに一幅の絵画を眺めているよう。至上の目覚めを体験できそう。

そして、2階からさらに上へと螺旋階段を進んでいくと、塔の見晴し台に到着。360度の自然豊かな景色が眼下に広がり、ストウ・スクールや広大な敷地の遠方に建つモニュメントまでも見渡せる小さなベンチもあるので、景色を眺めながらのティータイムも楽しめよう。

造園の魔術師たちが描いた風景 ストウ・ランドスケープ・ガーデンズを歩く

■ガーデニングの国が生んだ造園法「風景式庭園」を堪能できるストウ・ランドスケープ・ガーデンズ。ゴシック・テンブルに宿泊せず、庭園のみを訪問したい場合には、ストウ・スクールへと続くゲートは通らずに、ナショナル・トラストの看板を目印に、入口へと進もう。駐車場のそばには、カフェやショップ、インフォメーション・センターなどが入った「New Inn」があるので、散策に出かける前に腹ごしらえしたり、地図や情報を入手したりもできる。ちなみにトイレは、「New Inn」以外では庭園内に1カ所しかないのご留意を。

今回は数あるモニュメントの中から、編集部の特選でピックアップした10カ所を訪れるルートをご紹介します。

それでは、「New Inn」から出発!

Bell Gate Driveを真っすぐ庭園へ向かって歩こう。

1 Bell Gate

18世紀に建造された、庭園を訪れた一般客のためのエントランス。ベルを鳴らすと世話役の少年が現れ、チップを払えば庭園を案内してくれたという。

2 Eastern / Western Lake Pavilion

少し距離を置いた男女のように、ペアで建つ小さなテンブル。ヘンデル作曲の18世紀のオペラ「忠実な羊飼ひ」に登場する『片思いの恋』をテーマにした二対の建物の中には、ベンチが置かれている。ストウ・スクールで青春を過ごす学生たちもここで恋を語り合っているのかもわからない。

少し距離を置いた男女のように、ペアで建つ小さなテンブル。ヘンデル作曲の18世紀のオペラ「忠実な羊飼ひ」に登場する『片思いの恋』をテーマにした二対の建物の中には、ベンチが置かれている。ストウ・スクールで青春を過ごす学生たちもここで恋を語り合っているのかもわからない。

3 Cascade and artificial ruins

土手の中程に建つ石造りのアーチ。アーチからのぞくEleven Acre Lakeの景色は、切り取られた絵画のような美しさ。小径を先に進み、ゆるやかな傾斜を上がっていくと、ゴルフ場が広がる。

4 Rotunda

ゴルフ場を横切る小径の側に建つ、ドーム状の屋根を持つ円形の建物。愛の象徴である黄金のヴィーナス像が目を引き。

5 Stowe House

見学ツアーに参加する場合は、南側の大階段を上ってハウスの中へ。階段を上りきったら、ハウスへ入る前にぜひ振り返ってみよう。Octagon Lake越しに、Eastern / Western Lake Pavilionとパリの凱旋門風のCorinthian Archなどが見渡せる(写真下)。



6 Temple of Ancient Virtue

ギリシャ様式のドームと円柱を持ったテンブル。円柱の内側にある部屋には、古代ギリシャの王たちの彫刻が4体あったが、1921年のオークションで売りに出された。現在はオリジナルの彫刻の複製像が建っている。

7 Temple of British Worthies

庭園のモニュメントの中で、コバム子爵の政治的思想が最も色濃く反映された建造物。シェークスピアやニュートンら、英国史上の有名人16名の胸像が飾られている。

8 Gothic Temple

数あるモニュメントの中でも異彩を放つゴシック・テンブルの中へ入ることができるのは、宿泊客だけ。特別なオープン・デーをのぞき、庭園の訪問客への一般公開は行われていない。

9 Palladian Bridge

ゴシック・テンブルが建つ丘のふもとにある湖にかかるこの橋は、湖を渡る荷馬車のために建設されたもの。訪問客に人気の建物。

10 Temple of Friendship

「友情の寺院」と名付けられたこのモニュメントは、庭園の南西の角地に建っている。1840年の火災で大きなダメージを受け、現在も半分朽ちた状態で保存されている。

【ゴシック・テンブルに宿泊する場合】

ゴシック・テンブルの詳細な場所は、カーナビには表示されない場合もあるので注意したい。

1 ゴシック・テンブルへ向かう第1のゲート

ゴシック・テンブルの宿泊客は、このストウ・スクール専用ゲートを通り抜けて直進。庭園やストウ・ハウスのみの訪問者は、ここへ入らずに右折し、ナショナル・トラストの「Stowe」の看板を目印に進む。

2 800メートル程車を走らせると、ストウ・スクールの第2のゲートが現れる。右手に警備員室 (Security Kiosk) があるので、ここで警備員にゴシック・テンブルの宿泊客だということを伝えて鍵を受け取る。予約した際に郵送もしくは電子メールで送信されたレターなどを見せよう。

3 ストウ・スクールやクリケット場を右手に、大きな空と見晴らしのいい景色を左手に見ながら、さらに直進。二股に分かれたところで舗装されている道路の方へ右折。再び二股に分かれるので、右折して舗装されていない道(木立が茂る方向)へ進み(写真・右側の道)、直後に再度二股に分かれた小径を左方向へ。あとは道なりに走らせる。

4 右手に木製のゲートが登場(同左下)。車から降りて、自分でゲートを開けよう。ゲートから真っすぐのびる、絵画から抜け出たかのような並木道(同右下)の先に、小さな教会と見紛うゴシック・テンブルが建っている。



Travel Information

※2015年1月19日現在

ゴシック・テンブル Gothic Temple

Stowe, Buckinghamshire MK18 5DF
Tel: 01628 825925 (ランドマーク・トラスト)
www.landmarktrust.org.uk

部屋数 2部屋 (4名まで宿泊可能)
料金 4泊5日、£538~
※宿泊は3泊4日から可能(要確認)。駐車スペース有。ペット可



ストウ・ランドスケープ・ ガーデンズ

Stowe Landscape Gardens
Stowe, Buckinghamshire MK18 5EQ
Tel: 01280 817156
www.nationaltrust.org.uk/stowe

開園時間
冬期(〜2015年3月1日) 午前10時〜午後4時
夏期(2015年3月2日〜) 午前10時〜午後6時

入場料
大人 £10.00
子供(5歳以上) £5.00
※ナショナル・トラスト会員は無料

アクセス

ロンドンから車で行く場合は、M40を北西方向に進む。ジャンクション10(9でも可)で降り、A43を北上。ブラックリーで右折し、A422へ。ナショナル・トラストの「Stowe Landscape Gardens」の看板が立つ交差点を左折し、約1キロ進むとストウ・スクールのゲートに到着するので、ゴシック・テンブルに行く場合はそのままスクール方向へ直進。ランドスケープ・ガーデンズに行く場合は、スクールのゲートを通り抜けて右折。道なりに進み、Stowe Avenueに突き当たったら左折。所要約2時間。

